



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



函館山を背に

3月26日、北海道新幹線が開業した。早春の暮れなずむ大野平野を走る「はやぶさ21号」

=同日午後5時45分ごろ、渡島管内七飯町（高所作業車から）

撮影：国政 崇（北海道新聞社函館報道部写真課）

若い現役記者の鋭い質問を願う 企画委員会35人が会見立案

今年1月から3月まで日本記者クラブが主催した記者会見は計70回を数える。会見をどのように組織しているのか、と聞かれることもある。クラブには企画委員会（西村陽一委員長）があり、各社の編集論説、解説委員ら35人が加わる。この10年で10人以上増えた。科学、スポーツなど分野を広げたためだ。毎月、どんなテーマでどのゲストを呼ぶか議論する。もちろん月に1回の会議で全てが決まるはずがない。ニュースに即応し、臨機応変で連絡を取り合う。ありがたいのは、ゲストへの依頼を率先して引き受けてくれる企画委員が増えていることだ。

最近の会見では、田中俊一原子力規制委員長、黒柳徹子さん、シリーズ企画では「安保法施行と日本の防衛」「チェンジ・メーカーズに聞く」などは委員のアイデアと人脈のおかげで実現した。

あれこれ苦労して招いたゲストなのに、現役の若手から質問が出ない時がある。正直に言えば、がっかりする。キーボードをたたいて発言記録作りに専念する記者も目立つ。パソコンにとらめついで、ゲストの表情も見えない。手が上がらないのはそのせいだろうか。ニュース価値の判断より、メモを一刻も早くデスクに送れと指示されているのだろうか。

紙離れはインターネットのせいだ、と嘆くより、質問しない記者だらけの会見こそはるかに深刻な危機だ。こんなばやきを取り越し苦労に終わることを願う。オンレコの場合でゲストに本音を語らせる鋭い質問こそ、若い記者に連発してほしい。（中井良則）

ウェブサイトと業務システムを全面刷新 16年度予算承認 3億9018万円

日本記者クラブの社員総会が3月30日開かれ、2016年度予算と事業計画を承認した。予算の経常収益（収入）は3億9018万円を見込み、前年度比0・32%減とほぼ横ばいとなった。会費収入の減少傾向は続いているが、人件費の削減で支出を抑え、記者会見や会報発行などの事業費支出は増額させた。参院選の党首討論会主催や月20回を超すハイペースの記者会見主催など、クラブの使命を実行するための財政基盤は確保できた。

手軽にアクセス、会員サービス向上
16年度は「ウェブサイトのリニューアル」と「業務システムの全面刷新」

新「に」取り組む。クラブのホームページは2010年、会見動画の再生画面をトップに置くリニューアルを行い好評だった。ただ、6年以上たち、スマホ対応など最新機能の追加や使い勝手の改善が課題となっていた。また、会員データベースや会費、会合費を管理する業務用のコンピュータシステムは20年以上使っているものや手作業に頼る仕事も残り、更新が迫られていた。

今回のウェブサイト・リニューアルにより、利用者が動画、会見レポートなどアーカイブや今後の会見予定にもっと手軽にアクセスできる。業務システムと連携させ、貸室の空き状況も直接、確認できる。また業

務システム刷新により、会員サービスの向上と業務効率化をめざす。経費は計3700万円を見込み、一般会計規模の1割近い。クラブとしては大きな投資だが、長年の懸念にまとめて対処する。特別システム更新積立預金を取り崩すため、事業支出には影響せず独立した会計となる。

収入 8割以上を占める会費
プレス会員と賛助会員の会費はクラブ収入の82・9%を占める大黒柱だ。プレス会員会費だけで収入全体の7割であり、中でも新聞・放送・通信の法人会員会費の比率は52%と過半数。日本中の報道機関がクラブ財政を支える構造だ。

OB記者など個人D会員（会費月額6100円）は、80歳になれば会費を月額2000円に割り引いてい

る。16年度は28人が80歳を迎えるため、割引分だけで134万円の収入減となる。D会員845人のうち80歳以上は304人と3分の1を数える。高齢化社会を引っ張る元氣な先輩にも支えていただいている。

支出 会見開催など幅広く可能
クラブは日本プレスセンターから9階と10階ホールを借り、いつでも会見を開く態勢を整え、会員に会議室などを利用してもらう。この借室維持費は支出全体の43・8%を占め毎年、最大だ。

近年、事務局職員の定年退職が続き新人採用を行ったが、職員総数は減った。人件費は毎年、減り続けている。

減らせないのは、会見開催、会報発行、ウェブサイトの情報発信、クラブ賞といった支出。これらの公益事業は公益社団法人の根幹であり、16年度予算も幅広い事業の展開が可能となった。

なお総会は16年度予算に先立ち、15年度補正予算を承認した。公益社団法人に移行した2011年に編成した積立金について5年経過したため、支出計画を見直し、必要な積み増しを行った。

（専務理事 中井良則）

クラブゲスト 3・5
ジェームズ・アクトン／黒川清／野口勝宏／田中俊一／宮野廣／村井嘉浩／森本あんり／上英明／忍足謙朗／小野舞純／黒柳徹子／若田部昌澄、加藤出／フィリッポ・グランディ／ゴンサロ・デ・ベニト／サウリ・ニーニスト／アリ・ビーザー／イーホル・ハルチュンコ／胡鞍鋼／トビー・ランザー／フォルカー・カウダー／小野寺五典／山崎拓／柳澤協二／ダニロ・テュルク／吉田浩一郎／鈴木直道

会見リポート
若田部昌澄・早大教授、加藤出・東短リサーチ社長／フィリッポ・グランディ・国連難民高等弁務官 6
サウリ・ニーニスト・フィンランド大統領／田中俊一・原子力規制委員会委員長 7
黒柳徹子・ユニセフ親善大使／村井嘉浩・宮城県知事 8

記者ゼミ 次世代ジャーナリズムの現場 9

特別企画 チェルノブイリ原発事故から30年 10・11
科学記者とチェルノブイリ 渥美好司
モスクワ支局 三瓶良一
汚染地域・30年後の現場 大野孝志

ワーキングプレス 12・13
トランプ旋風 日本テレビ 近野宏明
保育園ブログ 朝日新聞社 仲村和代

被災地通信 14
風化とどう闘うか 広がる「震災学習」の活動
岩手日報社 小野寺卓朗

リレーエッセー 15
フジヤマのトビウオ異聞
古橋廣之進さん
産経新聞社 佐野慎輔

書いた話書かなかった話 16・17
崩壊前後のソ連からイスラエルにユダヤ人が大移動 原田健男

マイBOOKマイPR 18
伊勢志摩サミット事前取材報告 18
読売テレビ 春川正明

試写会「スポットライト」 19
調査報道——書く覚悟、書かない責任 滝鼻卓雄

会議報告／2016年度予算書 20・21

村井 嘉浩 宮城県知事



仙台空港民営化や水産業復興特区など県独自の「創造的復興」推進を力説した。政府への直接的批判は避けたが、「中央にいちいちお伺いしなければいけない今の仕組みは問題。分権化が必要」と訴えた。現役記者の出席が少なかったのが気になった。

■3・25(金) シリーズ企画「3.11から5年」⑩／司会：橋本五郎委員／出席：51人

森本 あんり 国際基督教大学教授



米大統領選を貫く論理は「キリスト教のアメリカ化＝土着化」と言う。「トランプ氏は神が祝福したから、自分は金持ちとなり成功したと自信をもつ。福音派は彼こそ正直だと支持する」。宗教と政治の根底に流れる米国独特の反知性主義。選挙の見方が変わった。

■3・2(水) 研究会「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 大統領選」②／司会：杉田弘毅委員／出席：102人／会見詳録

上 英明 神奈川大学助教



31歳、新進気鋭の研究者。ヒスパニックと選挙を米政治史に位置づけた。「ルビオは多数派をも魅了していたのに」と惜しむ。トランプ現象を、社会の自信の喪失としての「ネイティビズム」(排外主義)で解説。「このままでは共和党の将来はない」と警鐘も。

■3・18(金) 研究会「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 大統領選」③／司会：中井良則専務理事／出席：68人

忍足 謙朗 元国連WFPアジア地域局長



人道支援の現場を退職し、久しぶりの日本。「内向きのニュースが多い。世界の不平等、不公平を知ってほしい。それはメディアの仕事では」と注文した。国際機関のリーダー論を聞かれ「仲間の意見を聞く。僕は上を気にしないで下を気にしていた」と苦笑い。

■3・3(木) シリーズ企画「国連と日本人」④／司会：秦野るり子委員／出席：36人

小野 舞純 国連事務総長室シニア・オフィサー



国連事務総長室で唯一の日本人幹部職員。地球規模での課題を示した「持続可能な開発目標(SDGs)」をまとめあげ、「国連勤務20年間で一番大きな仕事」と振り返った。国連内部では「次期国連事務総長は女性では？」とのうわさが流れているという。

■3・24(木) シリーズ企画「国連と日本人」⑤／司会：宮田一雄委員／出席：38人

ジェームズ・アクトン カーネギー国際平和財団 上席研究員



「過剰なプルトニウムを所持しないとの日本の国際公約とは逆に、毎年4トンずつ備蓄が増えていく」と警告。「余剰分をMOX燃料で使うのは非現実的」として、日米原子力協定延長時に「消費可能分しか抽出しない」とする付帯決議など具体的提案を行った。

■3・1(火) シリーズ企画「3.11から5年」⑪／司会：杉田弘毅委員／通訳：池田薫／出席：65人

黒川 清 元国会事故調査委員会委員長



原発事故後、クラブ会見の登場は5回目。国会事故調は原子力規制への立法措置などを提案したが、「規制委員会のスタッフはヒモ付き出向で親元ばかりをみている。もっと世界から専門家を呼ぶべし」と叱咤した。「若者に変化を感じる。それだけが希望」

■3・4(金) シリーズ企画「3.11から5年」⑫／司会：倉重篤郎委員／出席：90人

野口 勝宏 写真家



本業は広告カメラマンだが、郷里・福島など被災地で撮った、背景を消した「絵画のような」草花の写真が反響を呼び、今年5月、作品が飛行機にデザインされて大空を飛ぶ。「つらい時こそ花の力が必要。写真家は社会に貢献できる仕事だと実感している」

■3・7(月) シリーズ企画「3.11から5年」⑬／司会：瀬口晴義委員／出席：22人

田中 俊一 原子力規制委員会委員長



委員長就任から3年半。組織の透明性と中立性には合格点をつけたが、「全ての国民を安心させるような手品はない」とも。揮毫は「鈍に生きる」。「私の本音のようなもの。敏感では体がもたない」。批判にさらされるポストの苦悩がにじんだ。

■3・22(火) シリーズ企画「3.11から5年」⑭／司会：服部尚委員／出席：102人

宮野 廣 日本原子力学会廃炉検討委員会委員長



福島原発事故の教訓からリスクの考え方を論じた。意外だったのは原子力規制委への厳しい注文。「規制委が防災(住民避難など)を考えないのは大きな間違いだ」「説明責任を果たしていない。もっと対話を」「リスクを分かっている人が少ない」。本当に安全か？

■3・25(金) シリーズ企画「3.11から5年」⑮／司会：服部尚委員／出席：52人

アリ・ビーザー 米・映像作家

広島・長崎の被爆者への取材をもとに本を出版。祖父は原爆投下機の乗員だった。「原爆に対して怒りがあるのは理解している」「2度と起きないための努力をすること」と語った。原爆使用の是非については明言せず、もどかしさを感じさせる場面もあった。

■ 3・15(火) 記者会見／司会：中井良則専務理事／通訳：吉國ゆり／出席：40人

イーホル・ハルチェンコ 駐日ウクライナ大使

ロシアによるクリミア併合から2年。「クリミアは軍事基地化している。ロシアがクリミアから出ていくのが唯一の解決策」。内政の混迷には「改革の方向は正しいが、改革のスピードが遅い」。「昨年未以来、ロシアから天然ガスは一切買っていない」とも。

■ 3・16(水) 記者会見／司会：脇祐三委員／通訳：西村好美／出席：61人

Hu Angang
胡鞍鋼 清華大学国情研究センター長

経済学の博士号を持つ現代中国研究の第一人者。会見前日閉幕の全人代で採択された第13次五カ年計画を解説。国有企業について「学者だから言える」とした上で、日本と中国を師弟にたとえ「30年前の先生は今、生徒から学ぶべき」と断言。会場から笑いが起きた。

■ 3・17(木) 記者会見／司会：坂東賢治委員／通訳：徐一睿／出席：80人

トビー・ランザー 国連事務次長補兼国連サヘル地域
担当人道調整官

担当する西アフリカのサヘル地域は、過激派ボコ・ハラムなどのテロ、気候変動による干ばつ、政治的な腐敗により、世界で最も貧困かつ危険な地域といわれる。「農業、教育、保健医療、道路の改善で状況をよくしたい。ぜひ日本の継続的支援を」と訴えた。

■ 3・18(金) 記者会見／司会：土生修一事務局長／通訳：池田薫／出席：36人

フォルカー・カウダー 独キリスト教民主・社会同盟
(CDU/CSU)院内総務

ベルギー連続テロの翌日。「パリのテロも欧州に生まれ育った者の行為だった。難民の大量流入とは直接、関連しない」と冷静に説明した。だが「ドイツでテロが起きていないのは幸運にすぎない。開かれた社会で24時間、監視はできない」。決め手がないテロ対策。

■ 3・23(水) 記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：田口絵美／出席：31人

くろやなぎ てつこ
黒柳 徹子 ユニセフ親善大使

意外にも当クラブ初登場。ユニセフ親善大使として訪問した国々での経験を「プロの話術」で再現した。死にかけている5歳の子どもから「あなたの幸せを願っています」と言われた挿話など、子どもたちとのやり取りが出席者の胸に迫った。動画必見。

■ 3・24(木) シリーズ企画「国連と日本人」⑥／司会：川村晃司委員／出席：86人／会見詳録

わかたべ まさずみ
若田部 昌澄 早稲田大学教授 (右)
かとう いずる
加藤 出 東短リサーチ社長

意見の異なる2人の対論。「マイナス金利は金融緩和の延長。日銀の論理は一貫している。アベノミクスの原点に戻れ」(若田部)「日銀は2%目標で短期決戦に失敗。戦中の日本と重なる。戦略転換を」(加藤)

■ 3・2(水) 研究会「どうみるマイナス金利」①／司会：播摩卓士委員／出席：123人

フィリップ・グランディ 国連難民高等弁務官

今年1月に就任したばかりだが、27年間の国連機関勤務歴を持つ。「ソリダリティ」の言葉を何度も使い、国際社会が団結してシリア難民を救済するよう訴えた。特に奨学金や職業訓練など未来を見据えた「難民への投資」の重要性を強調した。

■ 3・2(水) 記者会見／司会：秦野るり子委員／通訳：藤岡美恵子／出席：72人

ゴンサロ・デ・ベニト 駐日スペイン大使

支倉常長にさかのぼる日本との交流を振り返り「スペインにとって日本はアジアの主要なパートナー」と強調した。質問はスペインの現状に集中。カタロニアの独立は「憲法上、不可能」と中央政府の立場を説明し、難航する連立政権交渉は「不調なら再選挙に」。

■ 3・8(火) 記者会見／司会：中井良則専務理事／通訳：丸山啓子／出席：38人

サウリ・ニーニスト フィンランド大統領

2012年3月に大統領就任。「難民の統合には雇用が重要だが、わが国は失業率が高く困難」。「隣国ロシアとは見解を異にすることも多いが、ロシアはプラグマティックに動ける国」。欧州とロシアに挟まれた小国の指導者として、現実直視の姿勢が印象に残った。

■ 3・9(水) 記者会見／司会：伊藤芳明理事長／通訳：池田薫／出席：85人

鈴木 直道 北海道夕張市長



10年前、財政再建団体となった夕張市。職員給与を最大40%カットし、95億円を返した。「1秒ごとに67円を返し、着実に健全化が進んでいる。給料を上げてやって、と市民が言うてくれる」。人口減と赤字は日本全体の問題。35歳の市長が再生モデルを示せるか。

■ 3・30(水) 記者会見／司会：倉重篤郎委員／出席：42人

小野寺 五典 前防衛相



安保関連法施行前日の登場。「憲法の理念は素晴らしいが、憲法的前提である国連主導の平和が実現していない現実に対応すべきだ」。南シナ海問題には「戦前の歴史もあり、自衛隊のパトロールより、ASEAN各国への海上警備力支援の方が必要」と語った。

■ 3・28(月) 研究会「安保法施行と日本の防衛」①／司会：倉重篤郎委員／出席：52人

山崎 拓 元自民党幹事長



新安保法による自衛隊の後方支援に反対の持論を訴えた。「安保法制廃止でも日米同盟が毀損されることはない」と安倍首相の国会答弁にも反論。揮毫は「日米中、平和共存を画策すべし」。「小選挙区のせいで外交安保をやる政治家が少なくなった」と嘆いた。

■ 3・29(火) 研究会「安保法施行と日本の防衛」②／司会：倉重篤郎委員／出席：48人

柳澤 協二 元内閣官房副長官補(安全保障)



防衛庁キャリア出身だが、安保法制には反対の立場だ。「武器使用の条件が他国軍並みになり、使用の可能性が高くなった。しかし使用の法的責任は個人のまま。発砲すれば矛盾が露呈しますよ」と警告する。「古い友達が減ったけど、新しい友達が増えました」

■ 3・31(木) 研究会「安保法施行と日本の防衛」③／司会：倉重篤郎委員／出席：49人

ダニロ・テュルク 前スロベニア大統領



今年予定の次期国連事務総長選に立候補している。大統領就任以前、国連で30年以上勤務。「国連は法的正統性と包摂性を持つ必要不可欠な国際機関。私の経験を生かし貢献したい」。「国連職員日本人比率の低さも問題。対応する必要がある」とも。

■ 3・29(火) 記者会見／司会：土生修一事務局長／通訳：池田薫／出席：38人

吉田 浩一郎 クラウドワークス代表取締役社長CEO



ネット上で仕事の受発注を仲介するクラウドソーシング最大手の経営者。「ほとんどの労働がAI(人工知能)に置き換わる。産業革命の最後の章が幕を開けた」と語る一方、「人同士のつながりや共感が経済の主体になる」として、人中心の未来を描いた。

■ 3・30(水) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」③／司会：水野裕司委員／出席：41人

会見余話

遺伝子のマジック?

米国育ちの日本人が東京、欧州で遭遇した出来事をコミカルに描いた短編映画「浴衣カウボーイ」の試写会が行われた(3・24)。上映後、監督、撮影、主演をこなした緒方篤さんが、機関銃のような早口でジョークを連発しながら日英2言語で作品を解説していた。

すると会場から「話が速すぎてよく聞き取れませーん!」と声があがり、監督はバツが悪そうに「すみません」と謝った。声の主は、なんと元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんだった。なぜ、緒方さんがここに?

実は篤さんは、日銀理事を務めた故・緒方四十郎さんと貞子さんの息子だった。篤さんはハーバード大を卒業して富士通に就職したが、ビデオアートに目覚め映像作家に転身した異色の経歴の持ち主だ。

コメディアンのようにノリがいい篤さんと謹厳実直な貞子さん。親子のあまりのイメージギャップに衝撃を受け、観たばかりの映画の内容がすっとんてしまった。

● 修羅場が育てた心遣いと伝達力
その気配りに、驚いた。

国連サヘル地域担当人道調整官のトビ・ランザーさんは会見前、出席者全員の席を回り握手しながら「コンニチワ」とあいさつ、会見中には司会の私に「のど渴か

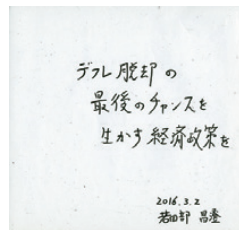
ない?」と水を勧めてくれた。スピーチは、こちらの英語力が急に上達したのかと勘違いするぐらい、わかりやすい英語だった。会見後に姿が見えないと思ったら、さっきあげたばかりの記念のネクタイを締めて「アリガトウ」と笑顔であらわれた。

20年以上、アフリカを中心に貧しく危険な現場で人道支援を続けてきた。「彼はたくさん修羅場をくぐっている」とは同行者の弁。他者への配慮や卓越した伝達力は、その現場で鍛え上げたものだろう。

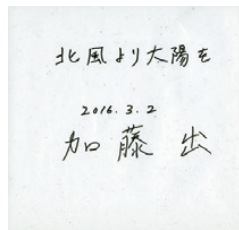
「多くの国(英国)は朝、昼、晩と食事がどんどんまよくなるんだ」と屈託なく笑うランザーさんに、修羅場で精錬された「明るさ」を感じた。(事務局 土生)

若田部 昌澄 まさずみ
早稲田大学教授
加藤 出 いする
東短リサーチ社長

日本銀行が導入したマイナス金利。欧州に例があるとはいえ、日本では前代未聞のこの政策をどう考えればいいのか。評価は一樣ではない。登壇いただいたお二人の意見にも開



きがあり、話を進めるうちに論点が浮き彫りになった。



根底には、黒田東彦日銀総裁が2013年4月に導入した「異次元緩和」に対する姿勢の差がある。

加藤さんは「うまく機能していない」という立場で、「突破口を切り開こうとしたのがマイナス金利」とみる。これに対して若田部さんは、現政権の経済政策、アベノミクスの中で金融政策が最も効いていると主張。今回の措置も「これだけで（全体が）うまくいくとは思わない」としながらも「今までの延長線にあ

金融政策の論点、浮き彫りに

り、その補完措置」と肯定的だった。マイナス金利導入の影響について若田部さんは、「期間の短いものから長いものまでイールドカーブ（債券の利回りや償還までの期間の関係を表す曲線）は押し下げられている」。金融機関の経営が打撃を受けるといふ懸念についても「影響は限定的」と断じた。

加藤さんが、太平洋戦争中の日本軍に例え「短期決戦でやろうとしてもできなかった。途中からどうやって講和に持ち込むのか」という戦略の転換が必要になったのに、ずるずる転換しなかった」として、日銀が2%の物価目標達成にこだわり過ぎる危険性を指摘。若田部さんも予想インフレ率が低下していることなどを挙げて「アベノミクスの原点に戻って再起動させる必要がある」と述べ、デフレ脱却をどう進めていくのか再確認が必要との認識を示した。

話は財政を含めて経済政策全体に及び、中身の濃い90分となった。時間の関係で紹介できなかったゲストチャンスを生かす経済政策を「若田部さん」、「北風より太陽を」（加藤さん）と記されていた。

企画委員 時事通信社解説委員長

軽部 謙介

フィリッポ・グランディ シリア和平のために もっとエネルギーを

国連難民高等弁務官

「就任早々、日本を訪れることができ大変うれしい」。1月に就任してすぐの訪日は日本政府のUNHCR、難民に対する持続的な支援に感謝するのが目的という。安倍首相はじめ政府、関係者と面会した。国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）事務局長など30年以上国際協力に従事し経験も豊富な。意欲的な抱負を明快に語ってくれた。

世界の難民、国内避難民、無国籍者の数は7000万人を超えた。中東シリアの内戦で、この5年間で1100万人以上が強制的な移動を余儀なくされた。国内避難民が650万人。難民は470万人で大半が近隣諸国にいる。



「昨年EUは欧州全体で難民受け入れの割り当てを決めたが、実際には実施されていない。その結果、

各国が互いに連携せず独自の対応策を取りはじめ混乱を深めています」「何より大切なことは、シリアの平和達成のためにもっとエネルギーを注ぐことです」

戦闘停止がその第一歩だ。

一方で、欧州にヨルダン、レバノン、トルコから直接難民を受け入れてほしいと要請する。「多くの人がボートで危険を冒して欧州に行こうとしている。それに代わる手段を与えてほしい」「何とかして合法的な正規なルートで入れるような代替策を与えてほしい」と。

「個人的な見解」と断った上で、「日本は大変信頼されているアクターです。他国のようにアグレッシブな政治的アジェンダを推進する国と見られていません。人道的分野で多額の資金のドナー国、JICAの事業など開発分野でも良きパートナーだとみられている」

その日本は今年、国連安保理の非常任理事国でG7議長国だ。「今年は危機の年だが、同時にチャンスでもある。さまざまなイベントや会議が予定されている。日本が素晴らしい力を組織して、難民状況の解決に向けて大きな役割を果たしてほしい」と期待を語った。

共同通信社客員論説委員 栗村 良一

サウリ・ニーニスト

フィンランド大統領

難民危機にEUは団結を
共通の隣国ロシアとの関係は

中東やアフリカなどから昨年100万人を超える人々が押し寄せ、未曾有の難民危機に見舞われている欧州。フィンランドには3万人以上が入国、人口比ではEUで4番目に多いという。難民受け入れをめぐる対立が続く



現状を大統領は、「各国がそれぞれの利害でばらばらに動き、欧州が培ってきた価値観が危機にさらされてい

る」と憂慮の念を表した。

会見の前日(3・8)、EUはトルコと難民・移民対策で基本合意に達した。トルコからギリシャに渡った「違法移民」を全員トルコに送還し、その代わりにトルコ内のシリア難民を同数EUが受け入れるというもので、大統領は難民問題解決への第一歩と評価した。同時に、難民受け入

れの分担を拒む国に対し、「新規加盟の際に財政援助を受けながら分担を拒むのは不公平だ」と苦言を呈し、EUの団結を強く求めた。

難民の社会統合はフィンランドでも最重要課題だという。統合の鍵は、雇用の確保と子どもの教育だが、失業率も約9%に上り、統合は容易ではなさそうだ。この冬、ロシアから30カ国以上2000人の移民が流入したことも重い負担となっている。

この日の会見でもう1つ注目されたのが「日本とフィンランド共通の隣国」ロシアとの関係だった。フィンランドはウクライナ危機以降EUの対ロシア制裁に加わり、「ミンスク合意が履行されるまで制裁を続けるべきだ」と述べる一方で、プーチン大統領と危機以降数回、さらに数週間以内にも会談する予定であることを明らかにした。「ロシアはシリアでもウクライナでも当事者であり、現実的な対応が必要だ」として、安倍・プーチン会談も「前向きに受け止める」と賛意を表した。

安全、自然を愛でる国民性、ムーミンと宮崎駿。共通点が多いと言うが、会場に置かれた「男女平等」などの冊子を読むと日本との相違点もまた大きいことを感じさせられた。

NHK解説委員 二村 伸

田中 俊一

原子力規制委員会委員長

新たな「安全神話」は避けよ



東京電力福島第1原発事故は、東日本大震災以前の原子力政策が「安全神話」と表現すべき不備と慢心の上に成り立っていたことを国民に明示した。田中氏の会見は事故後5年の原子力規制の到達点と新たな課題を浮き彫りにするものとなった。

「私たちの努力がどのように評価されるか、率直に質問を兼ねて受けるのが今日の目的」と切り出した会見は、質疑応答が中心の展開。田中氏の見解を要約すると、審査会合を公開、インターネット中継して透明性を確保する取り組みは定着し、政治からの独立性も一定程度は確保できた。地震や津波などによる過酷事故を未然に防ぎ、事故時も複数の手段で対応することを重視した新規制基準は、世界的にも厳しい水準に近づいた。だが、電力会社の意識は「規

制に通ったから安全だ」というレベルにとどまっており、まだ不十分だ—というのが田中氏から見た原子力規制の到達点と言えそうだ。

一方、原発事故時の住民避難については歯切れが悪いように感じた。国際原子力機関(IAEA)は、事故の未然防止から住民避難までを含めた重層的な対策を原子力の「深層防護」とする。「住民避難までを規制基準に含めるべきでは」の問いに対し「そういう国もあるし、そうではない国もある。わが国は基本的な指針や考え方は規制委員会が作る。それを踏まえて地方自治体が避難計画を作り、国の原子力防災会議がオーソライズする」と、現行法制上の仕組みを説明するにとどめた。しかし、その後に「それだけで住民が安心できるか」というと簡単ではない」とも述べた。

過去の原子力行政の最大の欠陥は、新たな対策の導入や制度の隙間を埋める作業を怠る「無作為」だった。規制委員会と地方自治体、国がそれぞれの立場で「避難計画は大丈夫だ」と思い込むことが、新たな「安全神話」につながらないことを願う会見となった。

福島民友新聞社東京支社 菅野 篤司

黒柳 徹子 くろやなぎ てつこ ユニセフ親善大使

数々の逸話を交え 子ども支援を訴える

32年前、親善大使に就任し初めて訪問したタンザニアで、村長らが「トット、トット」と話していた。子どもの頃から「トット」と呼ばれていた黒柳さんは不思議に思った。現地スワヒリ語で「トット」は子どものことと知り、「私は小さいときから子どものために働くようになっていたんだと思った」と言う。

当クラブでの会見は今回初めて。就任以来ほぼ毎年訪問した開発途上国の子どもたちとの交流を、数々の逸話を織り込みながら語った。

破傷風で死にかけてインドの男児に声を掛けると、彼は絞り出した声で感謝した。「あなたのお幸せを祈っています」。苦痛を訴えるでもなく、周りの大人を信頼して死んでいく子どもたち。このとき「子どもたちのための仕事をずっとやっていく」と思った。



と言う。

内戦、殺りく、自然災害、飢餓の現場を訪ねて「悲しみをいっぱい見てきた」。一方で、希望を捨てずに生きている子どもたちにも会えた。

この3月に訪ねたネパールでは7年ぶりに、ある女性と再会した。前回の訪問で、15歳だった彼女は川に入り砂を採取する労働をしていた。そのとき受けた励ましを片時も忘れずデザイナーをめざしてきたという。面会すると彼女は、袋から手作りのスカートとブラウスを取り出し、プレゼントしてくれた。黒柳さんは「徹子の部屋」で着用するつもりだ。会見ではユーモラスな逸話も次々と繰り出され、「子どもたちやユニセフのことを知ってもらおう、関心を持ってもらうことがとにかく大事」との思いが伝わってきた。

黒柳さんを親善大使に推薦した元国連難民高等弁務官・緒方貞子さんがひょっこり現れ、「親善大使をもっともっと続けて」と激励するサプライズもあった。会見は黒柳さんの長年の働きへの共感と称賛が込められた拍手で締めくくられた。

企画委員 西日本新聞社東京編集長

原田 正隆

黒柳さんを囲む緒方貞子さん、川村企画委員、緒方篤さん（左から・5ページに関連記事）

村井 嘉浩 むらい よしひろ 宮城県知事

「創造的復興」で 新たな「日本のモデル」に

元自衛官だから体力はあるのだらうと思っていた。よく通る元気な声は生まれつきか。5年前、あの未曾有の大災害が起きた時、多くの難問を前にしながら、私を含めた取材陣の前で、常に大きな声でリーダーシップを取っていた姿が目につく。



ぶ。被災者はこの姿にどれだけ元気づけられたことだろう。この人がいなければ、宮城県の復興がここまで進んでいなかったことは間違いない。

宮城県にとって、東日本大震災の発生は想定外ではなかった。しかし、実際に起きた地震の規模は想定約32倍、死者数は約64倍。あまりにも想定を超えていた。復旧か、復興か。言葉のニュアンスにこだわるメディアを尻目に、村井知事は着々と歩を進めている。沿岸15市町のがれき処理

は既に終了。「減災・防災のまちづくり」に向けた高台移転などの造成工事着手率は100%、遅れているとされる災害公営住宅も完成率は2016年度中に90%となる見込みだ。

「ただ戻すだけではダメ」と何度も力説する村井知事が掲げるのは「創造的復興」。仙台空港の民営化による地域活性化、漁協以外にも漁業権を与えることなどによる水産業復活、医学部新設による東北の医師不足解消……。これらの取り組みは単に被災地復興にとどまらず、新たな「日本のモデル」を見据えている。首都直下地震、南海トラフ巨大地震などが想定される中、国が「次に向けて」検討するべきことは何か。「食べ物、飲み物は何とかなる。本当に必要なのは燃料供給体制の確保」貴重な体験に裏打ちされた言葉には説得力がある。

次々に打ち上げる刮目すべきアイデアはどれも国の行く末に関わることばかりだが、「東京都知事や国政への関心はあるのか」という質問には、珍しく歯切れの悪い答えが続いた。「国には腹をくくったリーダーがいらない。西郷隆盛みたいな人がいればいいのになあ」

テレビ朝日災害報道担当部長

久慈 省平

49
記者ゼミ

あか お みつ し
赤尾 光史 元「新聞研究」編集長



「編集権」とは 歴史的背景から 考える

「編集権」と聞くと、外部勢力の圧力から報道機関が自社の編集方針を守るための権利だと思っている人が多いのではないだろうか。実はそうではなく、新聞経営者側の編集権利を守るための概念だと今回のゼミで知り、正直ショックを受けた。

戦後すぐに読売新聞で起こった2度の争議の際、従業員組合による紙面管理への要求や紙面の左傾化に対抗せざるを得なかった経営側が、編集権の確立を理由として人事刷新を行ったことがきっかけだという。つまり、戦後の混乱期に勢いを増す労働組合勢力に対し、新聞経営者が新聞発行に関わる全権能の集中的な保持を目的として打ち立てた政治宣言としての意味を持つ。

その時、「過度の民主化」を恐れるGHQが「新聞の編集方針を決めるのは経営者である」という声明を出したことも後押しになった。

1948年1月に新聞

協会の理事会は「経営者ならびにその委任せる編集責任の担当がその社の編集方針を遂行するに必要な人事を行うこと

は、自由にして責任ある新聞を作成するため(の)当然の権利である」とする決議を採択し、これが同年発表された協会の「編集権声明」の元になった。この声明には、編集権は「公正な評論、事実に基づく報道を行う自由」の維持のためにあり、権利の行使者は、経営者かその委託を受けた編集管理者だとされている。

とはいえ、経営者に編集権を集中させることが「公正な評論、事実に基づく報道を行う自由」を維持することにつながるのだろうか、この論理は飛躍していないかという疑問も赤尾氏から提起され、考えさせられた。

さまざまな場面で使われる「編集権」という言葉だが、疑問や問題点などを再考するうえで、まずは、この権利の歴史的背景、意味を正確に理解することから始めなくてはならないだろう。

ジャパントイムズ執行役員編集担当

大門 小百合

2・22(月)「編集権を考える」/司会…橋場義之特別企画委員/出席…8人

50
記者ゼミ

すず き けん すけ
鈴木 謙介 関西学院大学社会学部准教授



マスメディアが ネットで生き残るための 選択肢を提示

第3期の最終回は関西学院大学の鈴木謙介さんとウェブ社会におけるジャーナリズムを考えたい。

鈴木さんは「ネットは『理想的な社会を作ってくれる』という性善説に基づいて設計された」と説明する。プログラムを投稿すれば、みんなが改良・修正してくれる。ところが、社会に関する情報は、この改良・修正機能がうまく働かないという。

ネットビジネスは広告モデルのため、ネットメディアは広告主から独立しにくく、公平な議論の場を提供するには弱い構造だ。ソーシャルメディアは「包み隠さず公開する」という強い個人主義思想が基盤にあるが、私たちはそんなに強くない。このため「ソーシャル疲れ」を起こしてしまう、知人同士のコミュニケーションにとどまってしまう。このため情報発信による民主化の理想は現実にならず、ただ情報が飽和している

状態になっている。たくさんのお金が集まる市場には、たくさんのお金が集まるという相乗効果で、両者をつなぐ

「プラットフォーム」がビジネスでは注目を集めている。ただ、一つ一つのコンテンツの単価は下がり続ける。これをマスメディアに置き換えると、マスメディアはコンテンツ提供者となり、コンテンツは安くたかかれてしまう。これでは良質なジャーナリズムは維持できない。

鈴木さんはマスメディアの今後の選択として、①一定程度、中立性や客観性を犠牲にする②記事の内製化の度合いを低下させる③記事制作および市場の規模を縮小する—の3つを挙げた。

ジャーナリズムとして中立性や客観性を犠牲にはできない。「マスメディアが持つ膨大な過去のデータや新聞社の配達網など生かせるものはあるはずだ」という鈴木さんの言葉にヒントがあるのかもしれない。

朝日新聞Journalism編集長 岡田 力

3・14(月)「情報飽和時代の報道——ウェブ社会におけるジャーナリズム」/司会…橋場義之特別企画委員/出席…参加14人+ネット視聴9人

旧ソ連（現ウクライナ）のチェルノブイリ原発事故から4月26日で30年になります。以来、「原発」を長くウオッチする科学記者と、当時のモスクワ特派員、そして、30年後の今も強制移住区域に残る人々取材した社会部記者に寄稿していただきました。

この一文に付けた写真の話から始めたい。

撮影日は事故から4年たった1990年6月29日。場所は事故を起こしたチェルノブイリ原発4号炉（ウクライナ）の中心部。水蒸気爆発によって炉心も建物も崩壊した。中心部とは炉心の下の階層をいう。

当時、事故炉を覆うコンクリートの巨大な箱「石棺」内の深くまで取材できたメディアはなかった。1週間ほど原発幹部と交渉し、私と写真部の花井尊記者に許可が下りた。石棺に入る直前、「被曝しますが、1ミリシーベルトから5ミリか、どちらを



チェルノブイリ原子力発電所4号炉の石棺内
（撮影：花井尊・朝日新聞写真部／朝日新聞社提供）

選びますか」と聞かれ、返答に詰まった。滞在時間に差はあるが、どちらも中

心部を見られると知り、1ミリを選んだ。東京電力福島第一原発の事故後、被曝は現実的なものになったが、当時は1ミリであつても覚悟が必要だつた。

石棺内は1000を超す部屋や区画があり、薄暗い通路が迷路のように続く。汚染された壁や手すりは触れない。鉄製階段の上り下りで足を踏み外しそうになりながら、オレンジ色のライトに照らされた空間にたどりつく。肩から下げた放射線測定器の針は振り切れた。壁の向こうは溶け落ちた190トンの核燃料。換気しても崩壊熱で200度ある。案内役の原発職員は「立ち止まらないで」と繰り返ししたが、私は「墓守」役の作業員に話しかけ、花井記者はシャッターを押した。滞在時

科学記者

原子カムラの暴走許したメディア リスクの正体見極める責任が

■渥美 好司（朝日新聞社柏崎支局長）

間は25分。被曝は1ミリ内だった。事故当時、旧ソ連では経済促進計画が進行中。原発部門は稼働率を上げることに懸命で安全は二の次だった。福島事故の背景にも経済優先の社会状況がある。電力会社はコストがかかる過酷事故対策をせず、政府は原発推進の妨げになる安全審査体制の強化に後ろ向きだった。

原子カムラの暴走を許してきたメディアの責任は大きい。石棺取材で被曝の恐怖を痛感しながら、その後の報道に生かし切れなかった自分も含め、科学記者のムラへの警戒心は弱かった。

科学記者の取材相手は経済産業省、文部科学省、原子力規制委員会、日本原子力研究開発機構、大学・電力会社など推進側が多い。原発派研究者への取材頻度は今でも少ない。事故や安全解析に関わる生データを推進側のように入手できないから、主張の裏付けが弱いと感じてしまう。

しかし、状況は変わりつつある。福島事故で情報隠しが厳しく指弾され、政府・電力は対応を迫られた。再稼働論議の主舞台である規制委員

会の審査会合は、インターネットで生中継されている。ほかの原発関連審議会も傍聴しやすくなり、ネットで議事録と提出資料を見ることができる。福島の被災者、原発立地自治体住民らが国・電力を相手に起こした裁判で、原発側も部外秘データを入手する機会が増えた。

原発を貫いてきた京大原子炉実験所助教の今中哲二さんは、3月末で定年となった。3・11直後から福島県飯舘村で汚染調査を続け、20年以上前からチェルノブイリを何度も訪れて実態を論文に記してきた。自著の序文でチェルノブイリ周辺の数百の村が消滅したことに触れ、「専門家が測ることができないところにもっと肝心なことがあるような気がする」と書く。

それはジャーナリストの領域でもある。原発リスクは科学の論理だけで追い切れない。私は東日本大震災の後、東京本社、福島総局を行き来し、今は世界最大の原発拠点である柏崎刈羽原発（新潟県）をカバーする柏崎支局にいる。原発と自治体の日常を丹念に取材し、科学視点だけでは見えてこないリスクの正体を見極めたいと思う。

（あつみ・こうじ 1978年入社）
今年2月から現職

モスクワ支局
事故から半月

日本の親戚から妻に「子どもたちを外に出すな」と切羽詰まった国際電話がかかり、家族は日本での大騒ぎの一端によく触れた。邦人の多くが同じ経験をした。

あの日、1986年4月28日の午後、ストックホルム発で「ソ連で放射能漏れか」との情報が流れた。ソ連と北欧の間に位置するリトアニア共和国のイグナリナ原発かと思ったところ、沈黙が続いていたソ連当局は、その夜の国営タス通信で原発事故を初めて報じた。場所はイグナリナと逆方向のウクライナ共和国のチェルノブイリ、発生はなんと2日前の26日だった。

1年前にゴルバチョフ政権が「グラスノスチ」(情報公開)を掲げて登場した。しかし、事故直後の政府発表はほんのわずかで、全体像はつかめなかった。インターネットはまだない。電話事情は極端に悪く、テレビはソ連のチャンネルだけ。西側で大騒ぎになっていることはソ連市民に伝わらなかった。

放射能の危険がある中で、ソ連各地と同様にキエフでも5月1日に何事もないかのようにメーデー行進が行われた。

怖いことを知らされない怖さ

■三瓶 良一(元毎日新聞社外信部)

朝の日課としてウクライナ方面からの列車が到着するモスクワのキエフ駅通いが始まった(ターミナル駅は行き先が駅名となっている)。日本人留学生も貴重な情報源になった。

1週間ほどして、せきを切ったように原発報道が始まった。グラスノスチはその後、さまざまな分野で全面展開していった。

外国メディアの自由な取材を制限していたソ連当局も現地取材を組織した。ただし、1国1社。日本はくじ引きで当たった共同通信の記者が参加した。くじ引きを辞退する社も出た。

在留邦人にとってソ連生活の難点の1つは冬場の緑野菜不足。このため夫人たちは5月にモスクワ大学近くの丘で野草を摘み取り、冬のために備蓄するのが恒例だった。しかし、この年から取りやめになった。日本大使館からはフィンランドの牛乳が配給された。予定されていた歌舞伎ソ連公演は延期となり、在留邦人を失望させた(翌年に実現)。

事故発生から半月で身にしみて感じたことは、放射能の怖さは知っていたが、現状については知らされなかったことの怖さだった。

(みかめ・りょういち 1970年入社)

汚染地域
30年後の現場

話を聴いていくと、安全も務めてくれたが、熱く語る住民との通訳を介したやりとりは、1人の取材に3時間以上かかるほどだった。

「来年で30年。福島事故から5年。現地取材できるよう、会社を説得しよう」。昨夏、喫煙室でカメラマンと交わした会話が始まりだ。

筆者のいる原発取材班は、福島第一原発で起きていることや再稼働の動きに目を光らせながら、海や田畑の汚染状況を調べ、仮設住宅を回り、避難した人たちの苦悩を肌で感じている。節目にだけ騒ぐ「記念日報道」は嫌だが、この機会に、どうしても現場を歩きたかった。

とはいえ、ウクライナの人脈はゼロ。幸い、東京湾や福島沖の汚染取材と一緒にやってきた獨協医科大学の木村真三准教授は、チェルノブイリの汚染と被曝を調べ続けてきた専門家。誰に何を取材したいか。打ち合わせを重ねたうえで、木村准教授と旧知の現地在住邦人を通じて、取材の約束を取り付けた。

こちらのロシア語能力もゼロ。現地では、この在住邦人が通訳も務めてくれたが、熱く語る住民との通訳を介したやりとりは、1人の取材に3時間以上かかるほどだった。

「チェルノブイリは特殊じゃない」

■大野 孝志(東京新聞社会部)

なはずの原発が事故を起こし、住民は状況を知らされずに「3日だけ」と言われて避難していた。暮らしが根こそぎ奪われた街は廃墟となり、廃炉への道のりは遠い。健康を害しても、事故との因果関係は不明と言われる。事故の後、国内で原発が動き続けている。

30年前、チェルノブイリで起きたことが、日本で繰り返されているのだと実感した。

主に取材したナロジチ地区では、旧ソ連の崩壊で、汚染地域からの移住が止まった。今も1万人が残り、被曝と隣り合わせの毎日だ。福島では除染して、住民を帰還させるのが施策の中心。山は除染されず、山菜やキノコは汚染が続く。今後も、被曝の危険がすぐ近くにある。

日本ではウクライナのように、内戦が明日の生活を脅かすわけではない。だが、人々の記憶が上書きされて原発事故が忘れられても、「日本は違うよ」と言えるだろうか。でこぼこ道を行く車の揺れと、取材先で出されたウオッカで酔った頭の中を、同じ言葉がぐるぐる回った。

「チェルノブイリは、特殊じゃない」
(おおの・たかし 1993年入社)

トランプ旋風

近野 宏明(日本テレビ)

米大統領予備選
「常識」破りが「前例」となるのか

きょうは3月22日。アリゾナ、ユタ、アイダホの3州で行われている予備選と党員集会の結果を、支局で待っている。アメリカメディアが終日ブレーキングで伝えていたのは、ベルギー・ブリュッセルでのテロ事件だ。21時を過ぎ、間もなく投票や集会の終了を迎える頃になって、ニュースチャンネルはようやく大統領選挙のニュースを伝え始めた。

しかしテロ事件一色となった21時までのニュースのさなか、その名を繰り返されられた候補が1人いた。共和党のドナルド・トランプ氏だ。言うまでもない。国民の不安と恐怖を煽り、巧みにすくい取って支持を広げてきたトランプ氏が、この日も早くから過激な持論を展開したからだ。

昨年8月、私が初めてトランプ氏にぶら下がった時は、今をこんな状況で迎えるとは思わなかった。しかし現実は厳然たるもの。「常識」を打ち破り、「前例」を吹き飛ばして

きたそのエネルギーたるや、日々チャージされていると言っている。

この半年余り、トランプ旋風の拡大につれ大きく変わったのはメディア対応だ。うまく作戦を練れば本人に近づけたのが前例。昨夏の時点では、声を掛ければ「なんだい？」と、こちらに寄ってきたのだ。しかし今や外国メディアは彼の集会や会見では門前払いだ。ならばと「一般聴衆」として潜り込めば、目ざといスタッフ「その手に持っているデジカムを回さないように」と釘を刺してくる。

「外国メディアお断り」
ひるまず、直撃を試みる

そんな中、取材班は初戦のアイオワ、第2戦のニューハンプシャーで本人に接触。勝利への自信の言葉を聞き出した。その後「外国メディアお断り」のお触れが定着すると、はなから中に入る努力をしなくなった社も見受けられた。だが、われわれは簡単には引き下がらない。指名確

実が現実味を帯びてきたからこそ、あらゆる手段で接触する意義も大きくなるのだ。

その結果、3月に入ってからも立て続けに直撃を成功させている。党内で強まる「反トランプ」の動きをどう思うか直接ぶつけてみると、「気にしないさ」という答え。これは強がりなのか、心底からの自信なのか、日本の視聴者にはどう映ったろうか。選挙戦が終わるまで取材班は旋風の中心に迫ることを諦めはしない。

相変わらずなのは、前例がないほど演説に脈絡がなく、過激な言説を裏打ちする論理が見えないこと。「日本はアメリカの雇用を奪っている」「安保条約は日本だけが得をする」といった対日観について質問すると、昨年8月の答えも3月初めの答えも一緒なのだ。いわく、「アイ・ラブ・ジャパン！」

そして政策的暴言と四方八方への中傷も(多少はマイルドにした部分もあるが)続いている。そのたったひとつでも「選挙戦からの撤退」が常識なのに、彼の支持はむしろ伸びてきた。なぜ?と支持者に聞けば「彼は発言が一貫しているから」との声も多数。主張の中身より、その「グレートな姿勢」に惚れこむ権者もいると知った。

民主党はクリントン氏がリードするが、「反ウォール街」「格差是正」を訴えるサンダース氏が常識外の食いつきを見せる。この1年半余り、私は全米各地で何度も何度もクリントン氏の演説を生で聴き、ぶら下がってきたが、その私に対する振る舞いからして、彼女からは大統領の風格を漂わせようという自意識が伝わってくる。実際、常識で測れば彼女こそ有資格者だ。経験と実力はどの候補も凌ぎ、具体的な政策も詰めてある。弱者への目配り、オバマ外交への「弱腰」批判を受けた「強さ」も備える。だからといって、支持が爆発的に広がらないのが今回の選挙戦の特質だ。本人はさぞや不満だろう。

中身はともあれエネルギー溢れる明快さとチャームを選ぶのか、新しさに乏しく影もあるが着実・安定の中身をとるのか。「前例」と「常識」を参考にできない選挙戦は、いよいよわれわれの取材力と洞察力を試しかかる。戦いが終わった時、トランプ旋風という現象が「常識」破りの新たな「前例」となることだけは、間違いないさそうだ。

こんの・ひろあき▼1995年入社「NEWSリアルタイム」キャスター 政治部を経て 2013年4月からワシントン支局長

保育園ブログ

仲村 和代(朝日新聞社)

「女性の問題」ではない
働き方まで含めた幅広い議論を

「保育園落ちた日本死ね!!!」
過激な言葉で怒りをぶちまけた匿名のブログを機に、これまで「政治の端っこ」だった待機児童問題が、注目を集めている。

ブログが投稿されたのは2月中旬。私はその翌日、同年代の女性のフェイスブックの書き込みで、ブログのことを知った。私自身は、「日本死ね」という表現があまり好きになれず、静観していた。

2週間後、国会でブログのことが取り上げられた際、安倍首相は「匿名である以上、実際本当に起こっているか、確認しようがない」と答弁。議場は「誰が書いたんだよ」「中身のある議論をしろ」とヤジで騒然となった。この対応に、ネットでは当事者たちが「保育園落ちたの私だ」と怒りの声をあげ始めた。これは、大きな動きになる。そう直感した。

本人確認よりも「現実」を重視

ツイッターを通じて、ブログを書い

た本人と連絡を取った。返ってきたメールによると、投稿者は都内の30代前半の女性。夫とまもなく1歳になる息子と暮らす。保育園が見つからなければ、仕事を辞めなければならぬという。「ブログは独り言のつもりだった。こんなに反響があり、びびっています」文章が匿名かどうかより、中身の待機児童問題自体について議論してほしかった」と書いていた。

最近、ツイッターなどを通じて取材する機会が増えている。可能な限り、直接取材をお願いするが、難しい場合もある。本当に当事者であるという確証が取れなければ、どんなに面白い話でも、掲載を見送ることもある。

残念ながら、この「女性」には、直接取材は断られた。ただ、この時点で大切なのは、彼女が「本物かどうか」ではなく、書かれた言葉に自らの境遇を重ね、共感した人たちが数多くいるという現実だと考え、記

事に踏みきった。

反応にぶい経済界

動きはリアルの場にも広がった。国会での答弁から数日後には、「保育園落ちたの私だ」と書いた紙を持った人たちが、国会前に集った。保育制度の充実を求めるネット署名も始まり、1週間もたたないうちに約2万7千人が集まった。安倍首相も保育士の待遇改善の具体策を今春に示す方針を明らかにするなど、国会でも議論が始まっている。

一連の動きに、「女性たちが声をあげ始めた」という捉え方も目にする。だが、私はむしろ、以前から声



「保育園落ちたの私だ」と国会前で抗議行動する人たち(筆者撮影)

をあげていた問題に、ようやく(大手)メディアが目を向けたのだと感じている。自分たちにとって身近で、切実な問題が、国会で「匿名だから」と片付けられそうになった。こうも理解されていないのか。吹き出した怒りの根底には、その歯がゆさがあったように思う。

これだけの人材が、保育園に入れないという理由で復職を延期したり、離職したりといった状況は、企業にとってもマイナスのはずだ。ところが不思議と、声をあげるのは「ママ」と一握りの男性たちで、経済界の中心からは、待機児童対策の充実を求める声はほとんど聞こえてこない。まだまだ「女性の問題」とどまっていることの表れだろう。

単に保育園を増やせば済む問題ではない。保育現場は、質の低下や人手不足といった問題も抱える。預かり時間が長くなっていることも一因だ。長時間労働が当たり前の今の働き方を女性にも求めることが、「女性活躍」とは到底思えない。男性も女性も、仕事と家庭を両立できる社会にするために、働き方にまで踏み込んだ議論が必要だと思う。

なかむら・かずよ ▼2002年入社 大分
長崎 福岡などを経て 東京本社社会部

被災地通信 岩手県

風化とどう闘うか 広がる「震災学習」の活動

小野寺 卓朗 (岩手日報社)

3月11日。東日本大震災の発生から5年を迎えた。岩手県では甚大な被害を受けた沿岸部はもとより、内陸部でも鎮魂と復興の祈りがささげられた。6年目に入った今も復興途上の被災地だが、風化との闘いは大きな課題。震災体験者の「生の声」や遺構が教訓を伝え、風化を防ぐ活動は各地で広がっている。

復興のシンボルとなった三陸鉄道が、北リアス線で2012年6月にスタートさせた「震災学習列車」はその一例といえる。三鉄社員自らがガイドとなり、徐行運転や一時停止

もして被災地の今を訴える。修学旅行の中高生らはその光景と「語り部」の説明から被害の大きさ、教訓を学び、防災意識を高める。その意義は着実に浸透してきている。

北海道新幹線開業に期待 集客の後押しとなるか

当初のターゲットだった修学旅行から間口は広がり、14年4月の全線運行再開やNHK連続テレビ小説「あまちゃん」放送による知名度の向上が利用を後押しした。北リアス線・こたつ列車などの企画列車では、海女姿の三鉄アテンダントが震災ガイドマップを配り、車窓から被害や復興状況を説明。観光客の多くは被災地を目の当たりにした時、言葉を奪われる。観光で訪れたのを機に、震災を伝える。観光と震災学習の融合も図られている。



三陸鉄道「震災学習列車」の車窓から被災地の現状や課題を学ぶ県内外の乗客 (岩手日報社提供)

北海道新幹線の開業効果にも期待は高い。三鉄は修学旅行の獲得を狙い、首都圏をはじめ西日本にも営業エリアを拡大。15年度の企業や学校などの教育旅行は203件だった

が、16年度以降の予約は2月末時点で160件を超え、関西や九州からの修学旅行予約も多い。遠い地の若者に記憶を伝える好機と考えたい。

三鉄の汽笛が途絶えた5年前の震災時、私は盛岡市の本社整理部勤務だった。その前まで在籍した宮古支局へ数日後から派遣され、13年3月までの約2年間駐在した。メインの取材先は「津波太郎(田老)」の異名を持つ宮古市田老地区。碁盤の目のように整備され、高台に向かって放射線状に道路が延びた市街地と巨大なX型の防潮堤。見慣れたはずの景色は一変。重機の音はいまだ響いている。

生々しい映像も公開に踏み切る

この地に、津波で1、2階の鉄骨がむき出しになった6階建ての建物があった。5年が過ぎた今も残る「たろう観光ホテル」だ。土地建物

を取得した宮古市が復興交付金を活用した震災遺構第1号として保存整備。4月1日から宮古観光文化交流協会の「学ぶ防災」事業で一般公開が始まっている。津波の猛威と教訓を後世に伝え、ホテル社長が最上階で撮影した津波襲来の映像も見ることもできる。

この映像は11年10月に自治体関係者らに初めて公開され、私も同行取材した。撮影時と同じ最上階で映像を見た。「津波が来たよ。逃げて」。心臓の鼓動が早まる。言葉は出ない。「あまりに生々しすぎる」と震災からしばらくは公開を控えていた映像。なぜ公開に踏み切ったのか。津波の怖さ、命を守る教訓を後世に伝えたいという決意があったからにはかならない。

震災体験者が震災学習列車や被災ホテルを通じて訴えたいことは何か。実際に見て、聞いて、感じて、学んでほしいということだと思ふ。第一線にいる私たちがその教訓を発信することは、風化を防ぐと同時に、これから起こり得る災害で命を守ることにならないか。そう信じ、忘却にあらがいたい。

おのづから・たくろう▼2005年入社
宮古支局 報道部などを経て 15年から久慈支局長

私が会ったあの人

フジヤマのトビウオ異聞

元日本水泳連盟会長の古橋廣之進さん

佐野 慎輔（産経新聞社）

食べる、食べる…何とも小気味よく皿が空いていく。

70歳を超えてなお、この食欲。私は半ばあきれ、目を丸くして、その人を見つめていた。こんなにおいしそうに、かつ、たくさん食べる人はもう1人、胃を切除する

前の王貞治さんしか知らない。目が合うと、その人、古橋廣之進さんは「へへへっ」と照れたように笑った。「僕はイモのし

っぽまでかじって練習したもんだ。もう腹が減って腹が減って…」食べ盛りの頃は戦中、戦後。物のない時代に腹をすかせながら泳ぎ続けた。古橋さんと食事をする

と、いつもその頃の話になった。1949年全米水泳選手権に招かれて渡米、橋爪四郎、浜口喜博

さんら代表選手団はロサンゼルス郊外のフレッド・ワダ（日本名・和田勇）邸で合宿した。初めてテ

レビを見て驚き、初めて飲んだコーラやハンバーガーを食べたときの「感動」を幾度聞いたことか。うつとりとした表情が今も目に浮かぶ。今や飽食の国となった日本が飢えていた時代の話である。

古橋さんがその全米水泳で4つの自由形種目で世界新記録を出して優勝、敗戦に打ちひしがれていた日本国民を勇気づけた話はいまさらだろう。そして「The Flying Fish of Fujiyama」の異名がついたことも…。

ただ、異名については実際は少し違う。レース前、地元紙が日本代表を取り上げたときに、すでにこの形容で紹介していた。さらにいえば、邦字紙の羅府新報が「飛魚一行嚴重な合宿生活へ」の見出しでいち早く記事にしてもいた。必ずしも古橋さんひとりの異名ではなく、日本選手団を指した形容だったと考えていい。それが、全米水泳の快挙によって

自分ひとりの異名に収束していく。どこか違和感も抱いていた。

日本水泳連盟会長時代の古橋さんが「水泳は団体競技だ」と発言したことがあった。折から2000年シドニー五輪の代表選考をめぐる、日本選手権で優勝しながら選考から漏れた千葉選手がスポーツ仲裁裁判所に日本水泳連盟を提訴、大きな話題となった頃である。

感情論から千葉擁護の論陣を張る人たちが、「精神論であり、全体主義の押し付け」と批判した。古橋さんは弱音こそ吐かなかったが、「なぜ、理解してもらえないのだろう」と漏らしたことがあった。水泳は個人競技といえども、チームワークの善しあし、まとまりの良さが成績に反映するとの信念を持っていた。



スポーツ界初の文化勲章受章で会見する古橋廣之進さん（2008年11月／産経新聞社提供）

底流にはあの全米水泳があった。初の異境、それも戦後すぐ、日本非難が渦巻くロサンゼルスでの大会出場である。日系2世フレッド・ワダさんの献身が大きな支えではあったが、選手団の一体感が偉業達成に結実したことは言うまでもない。古橋さんは、そうした事実を歴史とともに分かってもらいたかった。

日本水泳連盟は千葉問題のあと、どの競技団体よりも明確な選考規定を設けている。そして、一体感を重視したチーム編成を変えていない。04年アテネ、08年北京、12年ロンドンと好成績を収めた要因である。

古橋さんが世界水泳選手権開催中のローマで亡くなったのは09年8月2日。日本水泳連盟は直前の6月25日、代表の愛称を「トビウオジャパン」と決めていた。もって瞑すべしと思ったことを覚えている。

（さの・しんすけ 特別記者兼論説委員）

次号は丸山昌宏さん（毎日新聞社）にバトンが渡ります。

崩壊前後のソ連からイスラエルにユダヤ人が大移動

——2つの国が、得たもの・失ったもの——

原田 健男



はらだ・たけお
1952年生まれ 75年山陽放送(岡山市)入社 JNNカイロ支局長 社会担当「いじめ問題取材プロジェクトチーム」キャップ 政治・経済担当デスクなど ニューヨーク日本協会ジャーナリスト 日米交換事業1期生 香川大学非常勤講師 著書に『聖戦布告 イスラムそして宗教』『いじめがあったら、こうしよう』など

シリア等の国々から多くの難民が押し寄せ、ヨーロッパはこれにどう対応するか、EUの結束を揺るがす大問題に発展している。今から四半世紀前、1991年のソ連崩壊前後にも似たような現象があった。社会主義計画経済が行き詰まり、国が混乱すると、人々は不満のはけ口をユダヤ人に向け、迫害を恐れたユダヤ人たちがソ連を後にした。

私はソ連崩壊前年の90年春、TBS系列のJNNカイロ支局での3年間の勤務を終えた後、これを取材すべくモスクワに向かった。

◆オランダ大使館前に長蛇の列

ソ連の首都モスクワは4月と言ってもまだまだ寒い。革ジャンパーにマフラーをしても早朝の風は冷たく感じる。そのモスクワのオランダ大

使館前には毎日早朝から数百人の人々が集まり、大使館の門が開くのを待っていた。彼らは当時のソ連国内に住むユダヤ人たちが、ソ連とイスラエルの間には国交がないためオランダ大使館内にイスラエルの利益代表部が間借りし、イスラエルのビザを発行しているのである。

並んでいる人々にインタビュールしたが、このうちある男性は「われわれはやはりユダヤ人なのでイスラエルに行きたい」と言い、また別の若者は「歴史上の祖国に行きたい。この国にいたくない」と吐き捨てるように言った。

このビザを求めるユダヤ人たちの中に49歳のタクシ運転手ヤコブ・メリマンさんもいた。メリマンさんの妻のニーナさんはユダヤ系ではないロシア人。ニーナさんは当初イス

ラエルへの移住に反対したが、ユダヤ系のメリマンさんの決意は変わらなかった。ついにメリマンさん一族20人は、夜11時にモスクワのキエフ駅を発する列車に乗り込んで、ハングリーのブダペストに向け出発した。

◆生活レベル低下が迫害の動機に

当時のソ連では、ゴルバチョフ大統領がペレストロイカ(改革)とグラスノスチ(情報公開)を推し進め、自由化・民主化の流れが進んでいた。モスクワ市内ではアメリカのマクドナルドハンバーガーがソ連1号店を出し、市民は珍しさからハンバーガーを買うのに長い列をなし、数時間待っても平気な様子だった。これまた最近店を出したアメリカの化粧品チェーンには女性たちが押し寄せ、

入場制限をしていた。

しかし、外貨ショップには物が豊富にある一方で、市民の台所である市場では、肉をはじめとする食料品の品不足が続いていた。人々は自由化・民主化は歓迎しているようだったが、食料品等が不足していることにはいら立っていた。

なぜ改革が進行していたソ連でユダヤ人迫害が復活したのか。もともと革命前のロシアでも、ユダヤ人迫害はたびたび起きている。

ミュージカルで映画にもなった「屋根の上のバイオリン弾き」は、19世紀末のロシア帝政下で、現在はウクライナの村に住むユダヤ人一家の物語だ。ロシア帝国はユダヤ人をこの地域に定住させ、移動を禁止するなどの政策をとってきた。多くのユダヤ人がロシア帝国に不満を持

ち、若いユダヤ人たちがロシア革命に参加したのも事実だ。

だいたい『資本論』を書いたマルクスはユダヤ人だし、革命当初のレーニンの内閣のメンバーは半分以上がユダヤ系だったといわれている。そして共産主義国家の誕生で、ソ連では宗教活動が制限された。

ところがソ連の政策が行き詰まると、人々は再びロシア正教に救いを求めたが、一方で反ユダヤ主義も頭をもたげ始めた。人々は経済の不満を「ユダヤ人が作った共産主義」のせいだと噂し、右翼団体等がユダヤ人襲撃さえ起こすようになった。

こうしてユダヤ人たちのソ連脱出が始まったのである。

◆右傾化推し進めた移民たち

さて先に記したヤコブ・メリマンさん一族は、ハンガリーのブダペストに列車で到着。ブダペストからは空路でイスラエルに到着した。メリマンさんは空港でイスラエル政府から当面必要なお金を受け取り、用意された宿に向かった。

取材した様子は「ユダヤ人大脱出。崩壊前のソ連から中東へ 20世紀の民族大移動」と題してTBSの報道特集で1時間番組として放送した。

その後2003年、イラク戦争の



旧ソ連からの移民ルート

始まりで再びイスラエルを訪れた。メリマンさんのその後が気になったが、すでに連絡は取れなくなっていた。しかし、首都エルサレムや商都テルアビブにはロシア語の看板が目立ち、滞在したホテルのメードはロシアから移住してきたユダヤ人だった。

イスラエルの人口は現在840万人に増えているが、そのうちロシアからの移民は120万人にも達し、人口の15%を占めている。ただ移民にとって良いことばかりではない。かつて国境を越えて毎日イスラエル側に働きに来ていたパレスチナ人が抵抗運動で来なくなり、この不足した労働力をロシア系移民が埋めた。ロシアでは弁護士や教師をしていたという人たちが、イスラエルではメードや建設労働者など肉体労働に従

事している例もあった。

またロシアからの移民はヨルダン川西岸などの占領地内にある入植地に入ることも少なくなかった。当然彼らは占領地のパレスチナ返還には反対する。移民は「イスラエル我が家」という右派政党も立ち上げ、一時はイスラエル国会の120議席のうち11議席を占め、連立内閣に参加して党首は外相を務めたほどだ。

◆科学者輩出、経済活性化にも貢献

さて、こうしてイスラエルに来たユダヤ人移民は120万人に及ぶが、今シリアなど中東・アフリカ地域からヨーロッパに向かう移民は、昨年だけで100万人に達したそう



ブダペストでバスに乗り込むユダヤ人移住者たち(筆者提供)

だ。ユダヤ人移民の場合は実は、国交

のないソ連とイスラエルの間で密約が交わされ、移住はスムーズだった。しかし今、大量の難民の到来にヨーロッパは混乱し、移民排斥を訴える排外主義が力を増してきている。

ヨーロッパでは、戦前疲弊したドイツでヒトラーが誕生した例がある。今また中国など新興国の勃興で先進国では経済力が少しずつ弱まり、再び排外主義が力を増しているようだ。ヨーロッパだけでなくアメリカ合衆国でも、経済と不法移民問題が大統領選の争点の1つになっている。

話は再びユダヤ人の移住に戻る。イスラエルでは最近、長年の戦争で培った軍事技術を核にハイテク産業が国の経済立て直しに役買っているそうだが、これを旧ソ連から移住してきた多くの科学者・技術者らが中心になって担っているという報告がある。そういえば、モスクワでイスラエルへのビザを求めて並んでいた人の中に、31歳の物理学者もいた。彼もハイテク産業に従事しているのかもしれない。

日本は難民認定や外国人の移民に厳しい制限をかけている。イスラエルへの移民が経済再建に貢献している姿は、今後の日本の移民政策の在り方に示唆を与えるものだろう。

マイBOOK マイPR

■大変を生きる 日本の災害と文学

小山 鉄郎（共同通信社編集委員兼論説委員）

文学作品でみる「日本人と災害」 2011年の東日本大震災の後、同年4月7日、東京電力福島第1原子力発電所に近い南相馬市に入った。悲惨な海岸線。見えない放射線への不安…。

文学担当の記者として、何をなすべきかを考え、日本人が大災害（大変）と、どう闘い、いかに生きて、どのように復興してきたかを文学作品を通して書いてみたいと思い、1年間新聞連載した。それを全面的に書き直して書籍化したものだ。

古代から現代までの大変を生きた人びとの中で、あえて1人の人物を挙げれば、濃尾地震、関東大震災と2度の大変に遭いながら、したたかに柔軟に自分を貫いて生きた西村伊作の人生に深く動かされるものがあった。



作品社 2808円

■心の華1 「思いを集めて」 42人のメッセージ

坪田 知己（日本経済新聞出身）

文章講座受講生のチャレンジ 5年前から各地で開いた文章講座の受講生に、作品発表の機会を提供したいと、一人1万円の参加費で20000字程度の文章を載せる企画を立てた。42人が参加し、家族への思い、人生への思い、仕事への思いなど秀作が集まった。デザインも良く、しつかり添削したので、書店販売の本に負けない出来になった。参加者には「一生の宝物」になったと思う。読みながら泣いた筆者もいる。普通の人のチャレンジの対象として毎年作っていき



自費出版 希望者はお問い合わせください

G7伊勢志摩サミット事前取材

地域住民との協力「目に見えないレガシー」も重要

「実はそれ、ぜんぶ三重なんです！」——三重県観光キャンペーンの愛称は、あまり知られていないけれど、松阪牛も、海女さんも、伊賀の忍者も、ぜんぶ三重なんだとアピールする。

それらにもう1つ加わるのが、5月下旬の開催が迫ってきた伊勢志摩サミットだ。

鈴木英敬知事に「サミット名に『三重』が入っていないが？」と質問すると、このキャンペーンの愛称を教えてくれた。

知事によると、サミット開催地に決まったと首相官邸から電話があった際に「名前は賢島サミットでいいですか？」と聞かれ、知事が「伊勢志摩サミット」でお願いします」と答えたとのことである。

知事が強調していたのは、地域住民の協力を得ての生活空間の中でのサミット。経済効果は1110億円ともいわれているが、知事は「目に見えない経済効果も大事だが、ジュニアサミットや外国語ボランティアをきっかけに国際交流につながるような、目に見えないレガシー（遺産）も重要だ」と強調した。

首脳会議の会場となる賢島は、面積が皇居の半分ほどの小さな島で2本の橋でつながっている。警備が簡単なのかと思っていたが、リアス式海岸の英虞湾は視界が悪く隠れる所が多いので、海上



サミット会場になる志摩観光ホテルの南浦彰総支配人から説明を受ける参加者＝同ホテル・ベイスuite屋上庭園

からの侵入への警戒が重要だと三重県警警備部長が指摘した。国内外から取材に来る約5000人の報道陣のための国際メディアセンターは、首脳会議の会場から約30キロも離れている。こんなに離れていては、開

催場所の雰囲気を与えることは難しい。首脳会議が開かれ各国首脳が宿泊する賢島の志摩観光ホテル。新旧2つのホテルがあるが、首脳会議も宿泊もどちらになるか決まっていない、と総支配人が説明してくれた。会議や宿泊に使われる部屋を見られなかったのは、まことに残念であった。

今回のサミットの主要議題は経済だろうが、せっかく日本で開催されるのだから、安倍首相がリーダーシップを発揮して、争いが絶えない国際社会に対して平和や共生の重要性を訴える強いメッセージを日本から発信してほしい。

読売テレビ報道局解説委員長

春川 正明

プレスツアー（3・8（火）／参加：14社20人）
鈴木英敬・三重県知事／篠原英樹・三重県警察本部警備部長／岩本弘一・三重県庁伊勢志摩サミット推進開催支援課長／国際メディアセンター（三重県営サンアリーナ）／サミット会場（志摩観光ホテル）



スポットライト 世紀のスcoop

調査報道——

書く覚悟、書かない責任

■ 滝鼻 卓雄



1976年2月、戦後最大の疑獄事件といわれた、ロッキード事件がアメリカの議会で発覚した。日本の新聞各紙はその日から、怒涛のような取材競争に突入していった。

全日空が導入したロッキード社製のトライスター機、その機種選定をめぐって、ロ社と日本の政界との間に「黒い闇」が存在するのではという疑惑

は、事件発覚の直後から、事件記者の間に流れていた。

私も口事件を追う記者の1人として、今でも忘れ得ない日々を過ごしていた。ちょうどそこだったと思うが、ウオーターゲート事件を題材にした「大統領の陰謀」という映画が日本でも上映されていた。ジャーナリズム界では伝説的な映画だ。米ワシントン・

ポスト紙の2人の記者が、ホワイトハウスの陰謀を発掘し、ついには当時のニクソン大統領を辞任にまで追い詰めた。その「調査報道」を映画化したのが、「大統領の陰謀」である。私にとっては、口事件とウオーターゲート事件の2つは、調査報道という形のジャーナリズムを考えると、決して記憶から消えない事件である。

あれからちょうど40年たった、この3月、私はボストン・グローブ紙の大特ダネを映画化した「スポットライト 世紀のスcoop」の試写を観た。当然のようにロッキード事件とウオーターゲート事件のことが、私のジャーナリズム脳によみがえってきた。

グローブ紙に着任した新編集局長が初めての編集会議で、地元ボストンの神父が30年間に80人もの児童に性的虐待を加えたとされる疑惑について、「もっと詳しく取材せよ」という指示を下した。新編集局長は重大な危機感を持っていた。インターネットに支配され始めた新聞界の現状、その結果、読み応えのある記事が減ったこと。つまり新聞の使命の劣化を感じたのだろう。

グローブ紙の「スポットライト」はひとつのネタを執拗に追いかけて、長期間にわたって連載を続ける特集ページだ。4人の記者が手分けして取材を

開始した。取材の対象は、かつて神父を弁護したことのある弁護士、虐待の被害者団体のメンバー、そしてカトリック教会の聖職者たち。弁護士が主張する守秘義務、聖職者たちの取材拒否など、取材の壁は厚かったが、4人の足による取材は次第に事件の核心に近づいていった。

疑惑の神父はなんと87人。ここで編集局長と記者たちは、神父個人を糾弾するのではなくて、教会という組織による隠ぺいシステムを暴く、という編集方針を確認した。ボストンという地域社会ではカトリック教会が絶対的権力者。それと敵対する報道は大きなリスクを伴う。加えてグローブ紙購読者の53%はカトリック信者だという。

しかし、2002年1月、全米を驚かせた「世紀のスcoop」は、グローブ紙の輪転機から刷り出された。

この作品の中で、私が忘れられない、いや忘れてはならない台詞がある。

「君が探している文書はかなり機密性が高いね。これを記事にした場合、責任は誰がとる」

「では、記事にしない場合の責任は」
この映画は今年のアカデミー賞で作品賞に輝いた。が、同時にとった脚本賞の意味の方が大きいと私は思っている。
(日本記者クラブ名誉会員)

4月15日から全国公開
Photo by Kerry Hayes © 2015 SPOTLIGHT FILM, LLC

■新しい会報 会員の声

●刷新歓迎。ゲスト一覧のコンパクトなまとめから会員全体へ興味が深まり、動画を見ることが多くなった。

●時代は「ウェブ・ファースト」。会報はゲスト一覧だけにして、会見リポートはウェブサイトに。

●ゲスト一覧と会見リポートにダブル感がある。

●会見リポートのページに日時や司会者掲載がない。一覧ページで確認を、というのは会報の読者に不親切だ。

●長年親しんだ会報に愛着があった。以前のレイアウトの方が落ち着きがあり読みやすかった。

●会見がクラブ活動の命なら、全てのリポートを1冊に凝縮させるのが会報の最大の使命と考える。速報性重視も分かるが、むしろ少し時間がたった時点で、じっくり読みたい内容が詰まっているのが会報の魅力だった。活字を読むことでしか、さまざまな着想・連想を得られないという思いが強い。

●ウェブサイトにある会報pdf版の一覧ページから会見リポートへアクセスできるようにした。便利だ。

●ウェブサイトの会見リポートは字数制約を受けず、情報量が増えた。
クラブゲスト面の改革について、ご意見をいただきました。ありがとうございます。会報委員会では会員の声を参考にしながら、より良い会報とウェブサイトの充実をめざします。

(会報担当 長谷川和子)

会 員 異 動 (2015年4月～2016年3月)

月	会員種別	プレス会員							法人・個人 賛助会員		特別 賛助会員	学生 会員	全会員			
		法人 (社)	基本 (人)	個人A (人)	個人B (人)	個人C (人)	個人D (人)	名誉・功労 (人)	(社)	(人)	(人)	(人)	合計 (社)	(人)	対前月増減 (社)	(人)
2015.4		136	751	359	57	91	860	12	62	140	95	106	198	2471	0	9
5		136	752	363	58	91	855	12	62	139	96	120	198	2486	0	15
6		136	752	363	60	91	854	12	61	138	96	121	197	2487	-1	1
7		136	746	357	61	90	852	12	61	138	96	126	197	2478	0	-9
8		136	748	359	60	88	857	12	61	138	96	126	197	2484	0	6
9		135	746	363	59	89	857	12	63	142	95	126	198	2489	1	5
10		135	747	359	59	88	855	12	64	144	95	137	199	2496	1	7
11		135	745	358	60	87	852	12	64	143	98	156	199	2511	0	15
12		135	745	355	61	87	849	12	64	142	100	155	199	2506	0	-5
2016.1		134	743	355	61	86	847	12	64	141	101	158	198	2504	-1	-2
2		134	743	356	61	85	845	12	64	141	99	158	198	2500	0	-4
3		134	744	349	60	85	844	12	65	143	100	162	199	2499	1	-1

■ 会議報告

● 第87回臨時社員総会

(3・30 会場)

書面議決社員を含め出席社員計120社の出席をもって成立(定足数67社)、定款第25条の定めに従い、伊藤芳明理事長を議長に議事を進めた。

2015年度補正予算編成、2016年度事業計画・同収支予算の理事会案を議決した(2ページ、21ページ参照)。

昨年5月の総会以降届け出のあった役員の一部交代を承認した。

● 第120回総務委員会

(3・2 小会議室)

2015年度の補正予算編成と2016年度事業計画・同収支予算案を作成し、理事会に上程することにした。

出席 原田委員長、西村、小田、飯塚、深田、西野、袴田、篠塚、西沢、川嶋、木村の各委員、伊藤理事長、水谷、板野の両副理事長、中井専務理事。

● 第580回理事会

(3・2 会場)

① 2015年度補正予算案の編成

積立預金の10年計画を見直し、特別修繕積立金に680万7608円、特別記念事業積立預金に1100万円、特別システム更新積立預金に3700万を積み増す補正案を議決した。

② 2016年度事業計画、同収支予算案の編成

総務委員会の原案どおりに議決した。新年度の収支予算案の規模は正味財産増減計算書で収益が3億9018万円、費用が3億9388万円で、新たに作成する業務関連システムの初年度の減価償却費分だけマイナスになる。会員減により収益は123万8000円減少しているが、人件費も減少しているため、必要なところは増額している。また、特別システム更新積立預金から3700万円を取り崩し、ウェブサイトのリニューアルと業務システムの全面刷新を行う。

③ 2016年度日本記者クラブ賞選考委員会の設置

クラブ賞内規に従い従来どおり、総務委員会の委員で構成(委員長＝原田亮介理事)、設置することを議決した。

④ 第87回臨時社員総会を5月25日に開催することを決定した。

⑤ ラウンジの閉室時間変更

施設運営委員会から提案のあった、ラウンジの閉室時間を30分繰り上げ、21時30分までとすることを承認した。

出席 伊藤理事長、水谷、板野の両副理事長、中井専務理事、西村、小田、原田、飯塚、深田、田辺、渡邊、矢島、岡崎、菅生、具志堅、西野(智)、袴田、西沢、篠塚、吉田、壺岐、川嶋、木村、西野(文)の各理事、沖永、滝花、二本の各監事。

● 2016年度日本記者クラブ賞・同特別賞推薦委員会

(2・26 10階シルバールーム)

1月末までに推薦のあったクラブ賞候補8氏と特別賞候補7件について審議した。全候補について意見を付して4月6日の選考委員会に報告した。

出席 春名委員長、五十嵐、岡部、音、鬼頭、茅野、野村、橋場の各委員。

● 第371回会報委員会

(3・9 大会議室)

3月号について意見交換した後、4月号の編集を協議した。

出席 飯塚委員長、稲沢、高橋、鈴木、向山、吉澤、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

● 第461回企画委員会

(3・14 10階Bホール)

新委員の恵村順一郎・朝日新聞社論説副主幹(旧・星浩氏)があいさつした後、今後のゲストについて協議した。

出席 西村委員長、恵村、安井、倉重、橋本、宮田、榎原、杉田、軽部、加藤、山本、瀬口、原田、宇留間、竹田、山崎、播磨、川村、堀、橋場の各委員。

● 第463回会員資格委員会

(3・17 10階Bホール)

4月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 小田委員長、菊池、花谷、齋藤、越中、新堀、小池、播磨、畑山、山本、國府、青木の各委員。

2016年度 正味財産増減予算書 (内訳表)

2016年4月1日から2017年3月31日まで

(単位:円)

科 目	公益目的事業会計					収益事業等 会計	法人会計	合計
	公益目的事情1 記者会見等	公益目的事業2 クラブ賞	公益目的事情3 会報・HP	共通	小計			
I 一般正味財産増減の部								
1. 経常増減の部								
(1) 経常収益								
特 定 資 産 運 用 益		278,000		873,000	1,151,000			1,151,000
受 取 会 費				252,200,520	252,200,520		71,133,480	323,334,000
プレス会員会費収入				211,791,060	211,791,060		59,735,940	271,527,000
賛助会員会費収入				40,409,460	40,409,460		11,397,540	51,807,000
事 業 収 益						65,576,000		65,576,000
貸 室 料 収 入						41,316,000		41,316,000
飲 食 売 上 割 戻 し						18,145,000		18,145,000
施 設 機 器 賃 借 料						6,115,000		6,115,000
雑 収 益						110,000	9,000	119,000
受 取 利 息							9,000	9,000
そ の 他 の 雑 収 入						110,000		110,000
経 常 収 益 計		278,000		253,073,520	253,351,520	65,686,000	71,142,480	390,180,000
(2) 経常費用								
事 業 費	157,511,200	17,778,020	41,353,380	56,919,250	273,561,850	56,155,200		329,717,050
借 室 維 持 費	73,976,400			55,610,250	129,586,650	24,488,200		154,074,850
借 室 料	38,444,000			24,027,500	62,471,500	19,222,000		81,693,500
共 益 費	6,846,400			4,279,000	11,125,400	3,423,200		14,548,600
空 調・光 熱 費	3,686,000			2,303,750	5,989,750	1,843,000		7,832,750
ホール専用利用費	25,000,000			25,000,000	50,000,000			50,000,000
人 件 費	61,557,000	14,482,000	20,443,000		96,482,000	28,433,000		124,915,000
役 員 報 酬	6,800,000	1,360,000	5,440,000		13,600,000			13,600,000
給 与 金	35,944,000	9,291,000	10,405,000		55,640,000	19,996,000		75,636,000
賞 与・諸 手 当	18,346,000	3,699,000	4,453,000		26,498,000	8,215,000		34,713,000
厚 生 費	467,000	132,000	145,000		744,000	222,000		966,000
事 業 費	21,977,800	3,296,020	20,910,380		46,184,200			46,184,200
会 議 費	1,839,240	70,740	448,020		2,358,000			2,358,000
事 業 運 営 費	17,879,160	687,660	4,355,180		22,922,000			22,922,000
会報発行・HP運営費			14,521,000		14,521,000			14,521,000
クラブ賞実施費		2,150,000			2,150,000			2,150,000
運 営 雑 費	397,800	15,300	96,900		510,000			510,000
通 信 費	1,256,000	251,200	1,004,800		2,512,000			2,512,000
印 刷 費	505,600	101,120	404,480		1,011,200			1,011,200
交 通 費	100,000	20,000	80,000		200,000			200,000
減 価 償 却 費				1,309,000	1,309,000	3,234,000		4,543,000
管 理 費							64,162,950	64,162,950
借 室 維 持 費							18,366,150	18,366,150
借 室 料							14,416,500	14,416,500
共 益 費							2,567,400	2,567,400
空 調・光 熱 費							1,382,250	1,382,250
人 件 費							18,662,000	18,662,000
役 員 報 酬							2,400,000	2,400,000
給 与 金							10,061,000	10,061,000
賞 与・諸 手 当							6,053,000	6,053,000
厚 生 費							148,000	148,000
そ の 他 の 管 理 費							23,977,800	23,977,800
ク ラ ブ 管 理 費							17,194,000	17,194,000
機 器 備 品 費							1,500,000	1,500,000
消 耗 品 費							1,425,000	1,425,000
事 務 委 託 費							2,213,000	2,213,000
事 務 雑 費							715,000	715,000
通 信 費							628,000	628,000
印 刷 費							252,800	252,800
交 通 費							50,000	50,000
減 価 償 却 費							3,157,000	3,157,000
経 常 費 用 計	157,511,200	17,778,020	41,353,380	56,919,250	273,561,850	56,155,200	64,162,950	393,880,000
評価損益等調整前当期経常増減額	- 157,511,200	- 17,500,020	- 41,353,380	196,154,270	- 20,210,330	9,530,800	6,979,530	- 3,700,000
当 期 経 常 増 減 額	- 157,511,200	- 17,500,020	- 41,353,380	196,154,270	- 20,210,330	9,530,800	6,979,530	- 3,700,000
2. 経常外増減の部								
(1) 経常外収益の部								
(2) 経常外費用の部								
当 期 経 常 外 増 減 額								
当期一般正味財産増減額	- 157,511,200	- 17,500,020	- 41,353,380	196,154,270	- 20,210,330	9,530,800	6,979,530	- 3,700,000

情報発信

■第10回安全保障シンポジウム

主催：ネットジャーナリスト協会

「混迷世界における国家戦略を考える～国際秩序の再構築に日本はどんな役割を果たすべきか～」をテーマに行われた。

田中明彦・東大教授がモデレーターとなり、小野寺五典・元防衛大臣（自民党）、長島昭久・元防衛副大臣（民進党）、黒江哲郎・防衛事務次官、加藤洋一・RJIF研究主幹、勝股秀通・日大教授らが登壇した。総合司会は川戸恵子・TBSシニアコメンテーターが務めた。（3.1 10階ホール）

■スマイルとうほくプロジェクト これからの復興へ～震災5年復興提言シンポジウム～

被災3県の新聞社（岩手日報社、河北新報社、福島民報社）は、復興支援として「スマイルとうほくプロジェクト」活動を継続的に行っている。震災5年にあたり、日々の紙面を通じ被災地と向き合ってきた地元紙が講演会や討論会などで情報発信を行った。（3.3 10階ホール）

■第31回「正論大賞」受賞記念東京講演会

同賞はフジサンケイグループが主催。今年は米ヴァンダービルト大学名誉教授のジェームス・E・アワー氏が外国人として初めて受賞した。「日米同盟はいかに中国に立ち向かうのか」をテーマとした講演会には約350人が出席した。（3.10 10階ホール）

■トークイベント シリア危機5年

主催：AAR Japan（難民を助ける会）

シリア危機が始まった2011年春からの5年間、メディアが何を伝え、何を伝えることができなかったのかを振り返るイベントを開催した。トルコにおける難民支援活動の現状報告も行われた。スピーカーは二村伸・NHK解説副委員長、長有紀枝・AAR理事長、景平義文・AARシリア難民支援統括。（3.14 10階ホール）

■東京新聞フォーラム「東京からの恩返し～飲んで福島を元気に～」

同フォーラムは地域に密着した話題や時事問題、趣味教養などをテーマに開催している。今回は福島の日本酒を取り上げ、蔵元の再生に向けた課題や魅力づくりなどを聞いた。ゲストは小泉武夫氏（農学博士・東京農業大名誉教授）、唐橋ユミ氏（フリーキャスター・福島県出身）、新城猪之吉氏（福島県酒造組合会長・日本酒造組合中央会理事）。フォーラムの様子は福島民報が取材し、東京新聞と題字を並べた号外を作成、参加者に配布した。（3.16 10階ホール）

■ボーン・上田記念国際記者賞授賞式

同賞は国際報道部門で優れた業績を残した記者に贈られる。2015年度は塩澤英一・共同通信社外信部次長（元中国総局）が受賞した。塩澤記者は報道規制や制約が厳しい中国において人民解放軍の動向を地道に取材。中国空軍による西

新しいOB会員

■伊熊 幹雄 1981年読売新聞入社。外報部（現・国際部）、ロンドン特派員、モスクワ支局長、編集委員など。



クリントン大統領候補の夫が挑んだ選挙を取材したのは、24年前。元気満々の夫人を見て、自分も勉強しなければと痛感します。

岩手日報の特別号外を配布



岩手日報の特別号外をラウンジで配布した。3月11日に発行、例年は横浜の日本新聞博物館で配っているが、今年はリニューアル休館中のためクラブに置くことになった。

東京、青森、秋田、名古屋、京都、神戸、愛媛、宮崎で配られた号外は、その地域から岩手を訪れ支援を続けている人たちの1面で紹介。8地域ごとに1面が全て違う、手間をかけた内容となっている。紙面は岩手日報のウェブサイト（http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/y2016/tokusyu/sh160311_gogai.html）で紹介している。

野口勝宏さんの写真展を開催



3月7日に会見した郡山市在住の写真家、野口勝宏さんの作品10点を展示した写真展「福島の花」を同18日までラウンジで開催した。

背景のない画面の上に花が咲く。特徴的な撮影手法を採った理由は？「こうして撮ると花そのものが強調され、見る人のなかにある花の記憶とリンクする。背景は見る人それぞれの心で埋めてもらえたら」

「美しい花から今の福島を想像してほしい」と会見で話した野口さん。写真展終了後、クラブに1枚を寄贈していただいた（9階和食レストラン手前の壁に掲示）。そのほかの作品はウェブサイト（<http://noguchi.photo/>）およびフェイスブックで見ることができる。

太平洋の制空権強化の方向と、そのための戦略装備の内容などを含む長期戦略について、他の内外メディアに先駆け特報するなどした。17日の授賞式のほか、翌18日には受賞記念講演会も行われた。（3.17 会見場）

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。林芳正・自民党税調副会長（3.2）、長妻昭・民主党代表代行（3.9）、野田毅・自民党税調最高顧問（3.16）、井上義久・公明党幹事長（3.23）、玉木雄一郎・民進党衆院議員（3.30）をゲストに招いた。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 春懐石(4/28まで)

先付:ピース豆腐、姫さざえ磯煮ほか お椀:潮仕立て 造り:三点盛り 焼物:鯖素焼き 煮物:若竹煮 揚げ物:白魚桜葉揚げ 食事:鯛飯 水菓子:季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円)
(板長:大井由光)

洋食 桜鯛のポワレコース(4/30まで)

コールドビーフサラダ、ハマグリ、チャウダー、スープ、桜鯛のポワレとカッペリーニ、バルサミコと香草のソース、桜アイスクリーム、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。
(シェフ:黒須修一)

歓送迎会プランをご利用ください 4/30まで

冷製4品、温製4品にそばと寿司がついてお一人3,240円のプランです(別途部屋代)。1,404円をプラスして2時間の飲み放題にすることもできます。ご予約は03-3503-2724まで。

クラブラウンジ 閉室時間変更のお知らせ

4月1日から、ラウンジの閉室時間を22時から21時半に変更しました。21時のラストオーダーは変わりません。貸室もこれまでどおり21時までご利用いただけます。

<訃報> 岡村黎明会員(朝日放送出身、82歳)が2月25日、上野尚一会員(朝日新聞社社長、79歳)が同29日死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

■会見詳録 会見の全文文字記録版

- シリーズ企画「3.11から5年」④「復興への種をまき、『脱・被災地企業』御手洗瑞子・気仙沼ニッティング代表(2016.1.29)
- シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」①「アメリカのポピュリスト政治——歴史と現状」古矢旬・北海商科大学教授(2016.2.5)
- 同シリーズ企画②「反知性主義から見た米大統領選挙」森本あんり・国際基督教大学教授(2016.3.2)

■音声アーカイブ 重要会見の音声録音

- 3月31日に89歳で死去したハンスディートリヒ・ゲンシャー・元ドイツ外相は、1992年2月にクラブで会見しています。この時のゲンシャー氏の肉声をウェブサイトの音声アーカイブで公開しています。

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ ☎3503-2724
- 受付 ☎3503-2721
- 会員事務 ☎3503-2727
- 経 理 ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員:133社 ●基本会員:741人 ●個人会員:1,308人
- 法人・個人賛助会員:65社・144人 ●特別賛助会員:99人
- 名誉・功労会員:12人 ●学生会員:129人
- 計:198社・2,433人

神戸新聞が引っ越し プレスセンター3階に

神戸新聞東京支社が3月14日、プレスセンター3階に入居しました。同紙東京支社の歴史は古く、1915年の開設から今年で101年目となります。沖永朝裕支社長は「引っ越しにあたり古い資料を思い切って『断捨離』したが、受け継がれた気概は持ち続けて情報発信していきたい」と話しています。

支社のほか、神戸新聞グループのサンテレビジョン、京阪神エルマガジン社は同じく3階で、スタジオを併設したラジオ関西は6階でそれぞれ業務を行っています。

プレスセンタービルに入居している地方会員社の東京支社は10社となりました。

東京五輪組織委員会が入会

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が、4月1日付で法人賛助会員として入会しました。東京2020大会の成功に向け、関係団体と共に大会の準備および運営に関する事業を行います。登録会員は下記の方々です。

武藤敏郎・事務総長

小野日子・スポークスパーソン

<理事交代>

TBSテレビ 岩田栄一報道局長(旧・西野智彦氏)

<監事交代>

徳島新聞社 林俊明東京支社長(旧・滝花圭三氏)

■斉藤恵子・総務担当が退職しました■

事務局のベテラン職員、斉藤恵子・総務経理担当が3月13日付で退職しました。入職はクラブがまだ帝国ホテルにあった1974年7月。草創期のエピソードやプレスセンタービル移転の苦労を知る唯一の職員として、事務局には、なくてはならない存在でした。

「母のような安心感」(本庄)「厳しさの中の温かさ」(佐藤)「お手本にしたい気配り」(村田)で後輩職員を引っ張り、支えてくれた先輩ですが、アラスカの料理についても、隠れたご意見番でした。鈴木店長(9階)と佐藤店長代行(10階)は「斉藤さんの率直な声は参考になりました。跡を継ぐのは誰ですか?」と語っています。

「クラブがこんなに大きく成長するとは思いませんでした。その歴史と共に事務局で過ごした42年を思うと感慨深いものがあります。会員の皆さま、長い間お世話になりました」と卒業の思いを述べていました。(事務局 長谷川和子)

会報委員会

委員長=飯塚 浩彦

委員=稲沢 裕子 大寺 廣幸 鈴木 仁
高橋 茂 長崎 和夫 藤井 良広
藤澤 秀敏 向山 明生 吉澤 正一
渡辺 大祐

(事務局:長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：川村^{かわむら}直子^{なおこ}（朝日新聞東京本社写真部）



火山活動が落ち着いてきた西之島。中央は火口 = 2月10日、太平洋の小笠原諸島（朝日新聞社機から）

ミニ創世記

魚のマンボウのようでもあり、水中から顔を出したラッコにも見える。2013年11月、東京の南約1000キロの洋上に浮かぶ西之島のすぐ近くで、噴火とともに陸地が出現。どんどん広がり旧島を合体して溶岩ですっぽり覆い、この姿になった。

もともとの西之島は、4000メートル級の海底火山の火口縁がわずかに海面に出た細長い島だった。今回の噴火の40年前の1973年にも、島の近くに噴火による新島ができ、やがて本島とつながった。地球の時間では「ほんの40年前」なのだろう。

忘れもしない。その73年、私は金融担当だった。田中角栄政権の日本列島改造ブームで、物価も地価も勢いづいたところに、石油危機が追い打ちをかけて「狂乱物価」に。日銀はこの年、政策金利の「公定歩合」を5回も上げ、年末には9%になった。

ある大銀行のトップ人事の取材で、「影響力がある」と聞いた高齢の相談役の家を訪ねた。本題は軽くかわされ、老バンカーが中堅行員だった40年ほど前の懐旧談を、ひとしきり聞かされた。「金解禁があり…デフレになり…」あくびをこらえ聞き流した。デフレはとくに博物館行き、と信じ込んでいた。

あにはからんや。「マイナス金利」とやらで、日銀に預金した銀行が、利息をもらえずに、逆に手数料を払うことになろうとは。

火山活動が一段落した西之島のこの先だが、海鳥の糞や羽毛や死骸が土壌となり、植物の種が鳥や潮流に運ばれてきて、新しい生態系を形成するという。ミニ創世記に世界の科学者が目をこらしている。

（土谷 英夫）